

13 複式教育

—子どもの豊かな気づきや感じ方を育む複式教育の支援—

吉浦公子・山田恵次
山中俊道・福島靖之

1 複式教育を通して育まれる「豊かな気づきや感じ方」とは

複式少人数学級の大きな特性としては、「少人数の学級構成」「異学年集団による学級構成」が挙げられる。本校では、これまで「個が生きる授業」「個が生きる授業の評価」の一連の研究テーマを通して、複式少人数学級の「よさ」を生かしていく教育の研究を進めてきた。

これまでの研究成果をふまえて、昨年度より「豊かな気づきや感じ方を育む複式教育の支援」を重点課題として、さらに研究実践を進めてきた。複式少人数学級の特性を「よさ」を生かすことにより、次のような「豊かな気づきや感じ方の育成」が期待される。

(1) 相手の立場や気持ちを尊重した気づきや感じ方

異学年相互の関わりの中で、上学年の児童は、下学年の児童との触れ合いから、これまでの自分の姿を重ねながら思いやりをもって接するようになる。また、その活動の中で、自分の成長に気づくこともできる。下学年の児童は、自分たちの活動には上学年の児童の支えがあったことに気づき、喜びを感じるとともに、自らも学ぼうとする。さらに、これからの自分の姿を描くこともできる。このように、異学年の関わりの中で実感できる気づきや感じ方を生かす。

(2) 気づき、感じたことを豊かに表現できる力

少人数であるために、一人一人の児童が自分の気持ちや考えを表現する機会を多く得ることができる。また、上学年児童は、下学年児童の表現のよさを見い出したり、自分の思いを豊かに表現することができるようになった自分に気づいたりできる。下学年児童は、上学年の児童の表現にふれることにより、より豊かな表現につながっていくと思われる。

(3) 一人一人の主体的な活動の中での気づきや感じ方

これまで複式学級の授業では、「渡り」（直接指導と間接指導を区別した授業）型支援が多く見られた。この支援の考え方をさらに進めて、常に両学年を見守るという「見守り」型支援を中心にしていきたいと考える。教師は、児童の活動を見守る中で、支援の時期・方法をつかみ、一人一人の子どものよさをみとる。この支援により、自立した子どもの育成が期待される。

2 豊かな感性を育むための取り組みの重点

「子どもの豊かな気づきや感じ方を育む複式教育の支援」の第1年次である昨年度は、複式縦割り活動「たんぼぼ集会」を子どもたちの力で創造する体験を中心として進めてきた。

その結果、異学年相互の関わりにおいて、思いやりが見られ、のびのびとした活動となった。また、少人数の中での表現の場において、一人一人のめあてがより大切にされ、個に応じた活動や教師・児童相互の評価もできた。しかし、自分たちの集団以外の場では、子ども達がつよさが十分には発揮できていないという課題も残された。そこで、第2年次の本年度は、本校の複式学級の児童以外の集団との交流を計画し、その中で、より豊かな気づきや感じ方を育んでいこうと考えた。

具体的には、①他校との交流（本校の代用附属学校である広島県比婆郡東城町立帝釈小学校）、②国際理解学習（ホンジュラスの先生を囲んで）を複式縦割り活動の年間計画に位置づけた。

以下その活動の実際を述べていく。

3 実践事例

(1) 他校の複式学級児童との交流

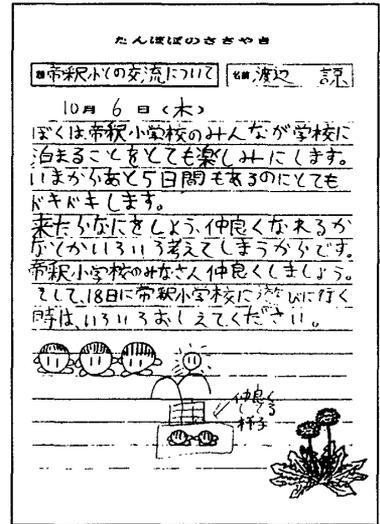
第1回目：帝釈小学校との宿泊学習 ー平成6年10月11日（火）・12日（水）ー

帝釈小学校は、代用附属として本校とは伝統的につながりがあり、研究会等での交流を行ってきた。しかし、子ども相互の交流は近年行われておらず、真の意味での交流の必要性を感じながらも、実現できなかった。今年度になって、帝釈小学校側が、アジア大会観戦のために広島市を訪れるという知らせが入り、この機会に児童相互が直接触れ合うことのできる交流を実施することになった。

① 事前学習

交流学習を進めるにあたって、事前に互いの子どもが気心を通わせておく必要がある。昨年度より、ビデオや手紙による交流は行っていたので、子どもたちの意識の中には、帝釈に友だちがいるという気持ちはあったと思われるが、実際に会うとなると意気込みはちがうようである。まだ会わぬ友に思いを馳せながらあれもしようこれもしようとその日を心待ちにしている様子であった。

子どもたちは、積極的に交流しようとする者「私たちから進んでいっしょに話したり遊んだりしたらいいと思います。」、具体的に遊びの内容も考える者「サッカーをしたり、バスケットをしたり、話をしたりいろいろなことをしていい交流をしたいです。」、料理を楽しむ者「ぼくは、いちばん楽しみにしているのは、カレー作りです。」、宿泊を楽しむ者「泊まるときは体育館で、夜、たんけんしたいです。」、不安感を抱く者「とてもドキドキします。来たらなにをしよう、仲良くなれるかなとかいろいろ考えてしまうからです。」相手の気持ちを思いやる者「私は帝釈小学校の人たちが来てよかったと思うような宿泊をしていきたいです。」など、さまざまな思いを抱いて、交流に期待していることが分かる。



② 学習の計画

計画には子どもたちの意見を取り入れていこうと考え、複式学級の運営委員を中心に話し合いの機会を持った。複式の特徴を生かすため、運営委員は各学年から男女1名ずつが選ばれ、異学年の意見を取り入れながら、計画を進めることにした。子どもたちから出た意見は次のようなことである。

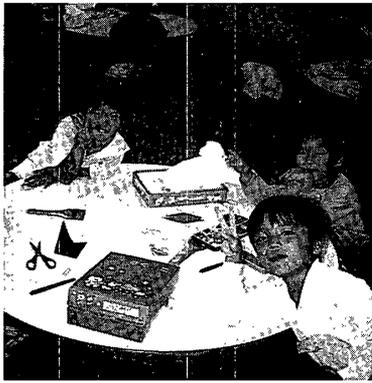
- ・おやつを食べる。 ・夜にきもだめしをする。
- ・料理を紹介し合う。 ・花火をする。
- ・星の観察をする。 ・絵画大会をひらく。
- ・やきいもをする。 ・バスケットやサッカーをする。
- ・リレーをする。 ・たたみで遊ぶ。

これらの中から、実現可能なものとそうでないものを分け、計画の中に取り入れることにした。また、できるだけ普段の生活に近い時間割にして、子どもの生活リズムを崩さないようにしようとの配慮から、夜の学習時間を設定したり、就寝時間は学年によって時間差をつけるなどの工夫をした。もちろん帝釈小の子

複式学級宿泊学習（帝釈小交流）実施計画案
平成6年9月20日

- 目的
 - (1) 複式学級の特徴を生かし、厳格りでの集団生活をすることによって、社会性や自主性を育てる。
 - (2) 調理やグループ学習などの活動を通して、総合的な学習力及び協力する態度を育成する。
 - (3) 他校の児童と宿泊を伴う活動を共にすることによって親睦を図り、今後の交流へと発展していくことをめざす。
- 日時 平成6年10月11日（火） 午後4時より
12日（水） 午後1時まで
- 参加者 東宮小学校児童 58名
帝釈小学校児童 36名 計94名
- 指導者 本校教員（山田恵次 吉岡公子 山中健造 福島謙之）
帝釈小学校の先生方8名（代表：金沢校長先生） 計12名
- 主な日程

時刻	11日（火）	12日（水）
6:30		起床 身仕度 荷物整理
7:00		朝食
7:20		掃除 布団移動
8:25		全校朝会（帝釈小学校紹介）
8:45		1・2校時 帝釈小と複式学級の交流授業
10:45		3校時 帝釈小と複式学級の交流授業 複式学級は平常授業
11:35		4校時 交流給食 お別れ会
13:50	5校時 お迎え準備	＊複式学級児童は午後の授業をカット、滞留終了後下校
15:00	帝釈小学校のみなさん来校 指導者打ち合わせ 4～6年生はクラブ活動参観 1～3年生は学習会	・教室で挨拶と打ち合わせ ・帝釈小児童は、本校教員引率のもとで、クラブ活動風景参観を兼ね、校内通り
16:00	お遊会	・東宮ホールで簡単なお遊会とグループ編成。
16:30	買い物（カレー材料）：中学生 炊飯準備：高学年 宿屋の取り付け：低学年	
17:30	風呂開始	
18:30	夕食	・東宮ホールで夕食。
19:10	片づけ、入浴、布団移動	・食事がすんだ所からすぐに片づけ、雑談へ移動。もどり次第
21:00	夜の学習会 1～3年生観戦	布団の移動。
22:00	4～6年生観戦	・午静粛を考慮し、就寝時間に男子：体育館 女子：東宮ホール おやすみ。



もたちの要望も事前に尋ね、計画の中に取り入れた。このことについては、子どもどうしの電話での会話によって伝え合うようにし、子どもレベルでの事前交渉を行わせるようにした。カレー作りや単式学級の授業に参加することなどは、この「子ども外交」によって伝えられたことである。

これらの事前の準備活動を進めるうちに、基本的な方針として次のようなことが明確になってきた。

ア 子どもレベルでの交流が自然に行われるように、普段の生活リズムに近い時間の使い方をする。

イ 帝釈小学校の児童にとって普段経験できない多人数の中での生活や学習活動を取り入れる。

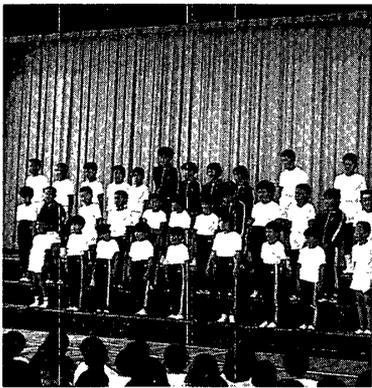
ウ 地域の特性を生かした活動を取り入れながら、生活まごごとを学習の場とする。

③ 宿泊学習

特別な行事として日を設定するのではなく、できるだけ平常の授業時間を使うという考え方から、11

日の午前中は正規の授業を行い、午

後から帝釈小の学校の方々を迎える体制に入ることにした。3時半頃の来校になる予定であったが、あいにくの台風の影響で本校に到着したのは5時を回ってからのことであった。そこで本校側で少しずつ夕食の支度を進めることにし、共同でカレー作りをするという構想は十分には実現できなかった。計画通りのスタートとはならなかったが、両校協力の中で臨機応変に活動した。子どもたちは、早くなじみ、言葉を交わしながら仕事を進めることができた。体育館で就寝の準備をする頃には、すでにいくつかの仲良しグループが



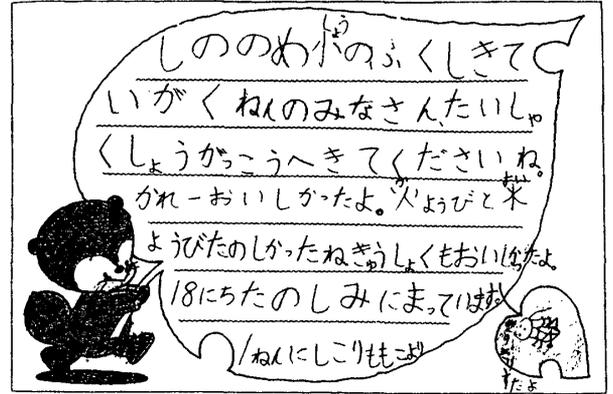
できており、並んで休むようにしていた。気候の良い時期なので寝苦しさはなく、夜半には、ほとんどの子どもが夢路についた。

明るく日も平常の授業日程の中で、複式相互の交流学習、帝釈小学校の子どもたちの単式学級での体験授業が行われ、両校の子どもたちにとっても生まれて初めての貴重な体験ができた。この日の本校の給食を共に味わうことで交流を締めくくることができた。折しもアジア大会にちなんだアジア料理週間の中で、この日の献立は「タイ料理」。子どもたちにとってまた一つ忘れられない思い出を加えることができた。バスで帰途につく帝釈小学校の子どもたちと1週間後の再会を誓い、言葉を掛けたり、窓越しに手を握ったりというほほえましい光景が見られたことから、この交流の成果を感じることができた。

④ その後の交流

交流後間もなく、複式低学年あてにかわいなお礼の手紙が届いた。また高学年では、個人で手紙のやりとりをしている子どももいた。帝釈小学校のみんなに喜んでもらえたことを知り、子どもたちも視野を広げた活動の楽しさを改めて感じたことであろう。この喜びが、次の交流へのエネルギーとなり、さらなる主体性を生んでいくものと考えている。





(2) 他校の複式学級児童との交流

第2回目：帝釈小学校との交流学习 ー平成6年10月18日（火）ー

第2回目の交流学习は、東雲小学校の子ども達が帝釈小学校を訪問し、体験学習を行うものである。1学期の事前学習で、帝釈小学校から送られてきたビデオによる学習を通して、野鳥観察や自然探索など一人一人が豊かな自然とのかかわりをめあてとして持っている。

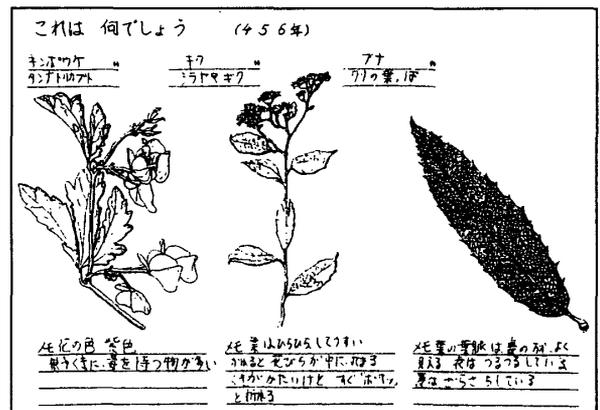
① 事前学習

運営委員の集まりで、帝釈小学校に行った時にしたいことについて話し合いがもたれた。子どもの意見から、街の中での生活ではなかなかできないようなことを望んでいることがよく汲み取れる。

- ・自然観察がしたい。 ・学校の探検がしたい。 ・森の探検がしたい。
 - ・（帝釈小の）給食を食べたい。 ・動物をさわりたい。 ・（自然の中で）おにごっこをしたい。
- これらの要望を帝釈小学校側に伝え、活動として考慮していただくことにした。

交流実施計画案（帝釈小学校立案）

自然観察学習活動案	
指導者 中村理任 中田弘平	
1 日時 10月18日(火) 10:55~11:40	
2 場所 東雲小(1~3年)帝釈小(1・2年)・・・観察室 東雲小(4~6年)帝釈小(5・6年)・・・1階多目的ホール	
3 ねらい ○ 植物や動物について、自分が知っていることや調べたことを発表しあうことによって、自然を大切に、自然と楽しむことができる。 ○ 東雲小学校と帝釈小学校の児童どうしの交流を深め、仲良く活動できる。	
4 活動の流れ	
学習活動	準備物
1 自然観察発表をする。 毎週水曜日に行う自然観察発表会と同じ流れで進める。 クイズ形式で行う。 植物、鳥という題で進める。 植物や鳥の名前について答える。 植物については予め帝釈小の児童がいた図鑑図を配っておく。	○植物(絵本) ・トリカブト ・ヤマシロギク ・クリ など ○鳥(絵本) ・アカシヨウビン ・オオルリ ・イカル ・ミヤマホオジロ ・アオゲシ ・カケス
2 植物を観察して、図にかき表す。(高学年) オオモミジ(カエデ科)の葉をかき、二人一組になってかく。 できるだけ東雲小と帝釈小の児童が組になるようにする。 時間の余裕があれば、自分のかいた観察図を発表する。	○観察図(植物) ○観察カード(45枚) ○オオモミジの葉
○学校の周りを歩き、観察する。(低学年) ・クリやオオモミジの木や葉の観察をする。	



② 交流学习

豊かな自然に囲まれた帝釈小学校に到着したとき、全校児童や教職員をはじめとして保護者の

方々の温かい出迎えの中で第二回交流会が始まった。

帝釈小学校の子ども達の計画・進行により様々な交流活動が進められた。平素、自分の学校の少人数での活動が主となる帝釈小学校の子ども達にとっては、倍以上の人数での活動であるため、とても楽しみに待っていてくれたようであった。東雲小学校の子ども達から出された野鳥などについての質問は、帝釈小学校の子ども達にとっては、日常見なれている内容ばかりで、詳しく説明することができた。はじめは、緊張気味に司会をしていた帝釈小学校の子ども達も、東雲小学校児童の驚きや賞賛の反応によって、次第に積極的な活動や表現を行うようになってきた。

また、東雲小学校の子ども達は豊かな帝釈の自然のなかで、次のような体験学習を行うことができた。

1年生から4年生までは、合同で帝釈の植物や鳥の学習をした後、校舎の裏山へ栗拾いにいった。学校のすぐそばで栗拾いができることに対して東雲小学校の子ども達は驚きの声を上げるほどの喜びようで、帝釈小学校の子ども達に栗の採り方や出しかた、また、野生の食べられるキノコを教えてもらいながら仲良く活動した。5・6年生は、帝釈小学校の子ども達と二人一組になり、大もみじの葉を観察スケッチした。きめ細かい帝釈小学校の子ども達の観察力に、「本物そっくりだ。」というつぶやきが聞かれた。

昼食は、校長先生をはじめ、教職員の方々、全校児童、そして地域の方々の協力のもとに準備された竹の皮で包まれた大山おこわや手作りの竹の汁わんで豚汁をいただいた。子ども達は豚汁をおかわりしたり、また、竹の汁わんを大切にリュックにしまっていた。

帰りには、拾った栗だけでなく、姫リンゴのおみやげまでいただき、第2回交流学習を終えた。

(3) 国際理解学習

学校教育学部には、学校教育のあり方、中でも算数教育の研究と日本との文化交流のために中央アメリカのホンジュラスという国から現役の小学校の先生が来日されている。お名前はエディタ先生、本校には、実践研究と国際交流のため毎日いらっしゃっている。

① ねらい

複式学級では、本校の複式学級相互はもちろんのこと、同学年の単式学級、養護学級、さらに代用附属として古くからつながりがある帝釈小学校と交流を進めてきたが、交流の輪をさらに広げ、さまざまな人達との交流を深めていくためにエディタ先生と交流会を開くことにした。

複式中学年が企画立案し、運営していくことで、4年生は来年度複式高学年になってからのリーダーとしての心構えや企画・運営能力を養い、3年生は、企画の段階から複式全体集会に関わることで集団としての帰属意識を高めるとともに、複式全体集会などの運営方法を学習することをめあてとして取り組んだ。

さらにエディタ先生と交流会を開き、ホンジュラスや中央アメリカの文化を知る一つの手だてとするとともに、国際的視野に立った子どもの育成をはかることもめざした。

② 交流の流れ

〈1月13日〉

毎年恒例となっている養護学級と複式中学年との交流会「もちつき会」の振り返りをしているとき、単式学級、養護学級、帝釈小学校と交流の輪を広げてきたが、他にも交流の輪を広げることにはできないか考えてみるよう教師側から提案する。

〈1月18日〉

子どもたちとの話し合いから、エディタ先生と複式全体交流会を開き、今回は複式中学年の企画立案・運営で開いてみようという案が出された。

〈1月19日〉

複式プロジェクトとエディタ先生との間で交流会の日を1月28日に設定したことを話し、その

日までの日程を複式中学年で計画した。そのなかで、複式全体交流会を開くにあたって、企画の参考にするため、事前に複式中学年だけで「エディタ先生を囲む会」を開くことにして、プログラムを考えた。

〈1月21日〉

複式中学年で「エディタ先生を囲む会」を開く。

プ ロ グ ラ ム

1) はじめのことば

2) 自己紹介

一人ずつひとこと添えて名前を簡単に自己紹介した。そのあと、一人1枚ずつ作った名刺（画用紙の八つ切りをさらに4分の1に切ったものに、個人個人で名前や似顔絵、好きなものなどを書いたもの）をわたした。

3) エディタ先生のお話

ホンジュラスについてエディタ先生から詳しく紹介があった後、ホンジュラスのことについて質問コーナーが設けられた。

首都の名前は、テグシガルパです。これは近くにある高い山の名前に因んだものです。日本の国の花はサクラですが、ホンジュラスの国の花はランです。（ホンジュラスの国旗を示して）ホンジュラスの国旗はこれです。スペイン語を話します。英語はちょっとだけ話します。お金は、レンピラといい、一番高いお札は100レンピラで日本円にして約1200円です。このお札一枚で私の住んでいる町から首都までバスで一往復できます。ホンジュラスは物価がたいへん低いです。人口は約500万人です。面積は11万2194km²あります。メロン、バナナ、マンゴー、パイナップル、ミカンなどの果物がたくさんとれます。日本はメロンが高いです。ホンジュラスではメロン4個が200円ぐらいです。ミカンはちょっと甘いです。学校は6時45分から12時20分までです。日本のような給食はありません。小学校は1年生から6年生まであって日本と同じです。

4) 質問

Q： 休憩時間は無いんですか。

A： 休憩時間は東雲小学校と同じで9時から9時20分までの20分間です。

Q： その間ずっと勉強しているんですか。

A： そうです。6時45分から7時まで15分間掃除があります。そのあと7時から勉強が始まります。

Q： 学校には何人子どもがいますか。

A： だいたい720人います。

Q： どういう勉強を主にするんですか。

A： スペイン語、理科、社会、体育、音楽、家庭科全部1週間に10時間ずつあります。1日に7時間ずつ勉強します。

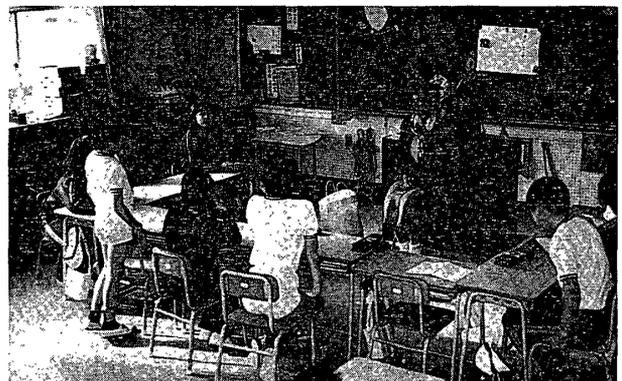
Q： 朝御飯は何時ごろ食べるんですか。

A： 5時から6時半ごろに食べます。

Q： 主食は何ですか。

A： 食べるものはいろいろあります。学校のなかに店があってそこで食べることもできます。家でごはんを食べずに学校で食べることもあります。

Q： 宿題はありますか。



A： あります。

Q： どれぐらいですか。

A： たくさんです。1日に10ページぐらい出ることもあります。日本の子どももホンジュラスの子どもも勉強することが多くてかわいそうだなと思うことがあります。

5) 最後に踊りのときの靴と衣装を紹介します。

6) 日本の遊びの紹介

日本の伝統的な遊びとして「かくれんぼ」をした。エディタ先生が早い段階で見つけてしまったので、隠れている子どもを「鬼」が見つける間、もう見つかっている子どもとエディタ先生で「茶摘み」などの手遊びなどをして待っていた。中にはホンジュラスにも同じような遊びがあるというものがあつた。

7) おわりのことば



〈1月26日〉

28日の交流会のプログラムと係分担を27日の複式全体集会で提案するため考えた。

〈1月27日〉

28日の交流会のプログラムと係分担を複式全体集会で提案した。複式高学年から時間設定をすると運営しやすいとの提案が出され、時間設定を加えた。係分担は複式中学年とする事になった。

〈1月28日〉

3校時体育館においてエディタ先生との交流会を開いた。司会、係などの運営は複式中学年が行つた。

プ ロ グ ラ ム

1) はじめのことば

2) 自己紹介

一人ずつひとこと添えて名前を簡単に自己紹介した。

3) 名刺わたし

複式中学年が「エディタ先生を囲む会」で行つたのと同じ要領で、一人1枚ずつ作つた名刺をわたした。

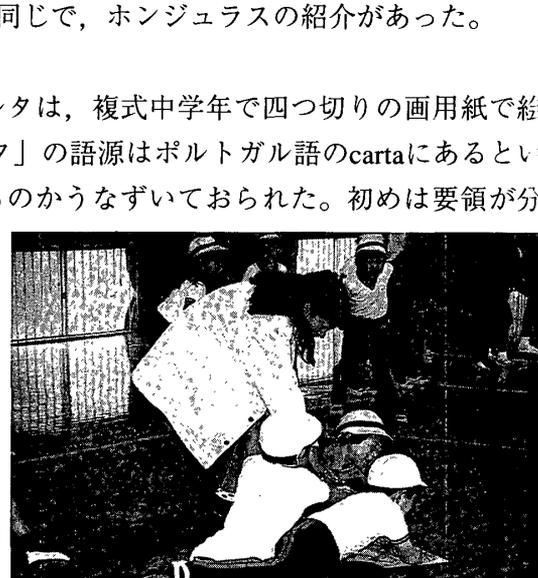
4) エディタ先生のお話

複式中学年の「エディタ先生を囲む会」での内容と同じで、ホンジュラスの紹介があつた。

5) 遊びの交流

日本の伝統的な遊びとして「カルタ」をした。カルタは、複式中学年で四つ切りの画用紙で絵札をつくり、言葉も係のものが考えて作つた。「カルタ」の語源はポルトガル語のcartaにあるという話をすると、スペイン語にも同じような言葉があるのかうなずいておられた。初めは要領が分からずに見ておられるだけだつたエディタ先生が、だんだん要領が分かり、子どもたちと一緒に、カルタ取りを楽しんでおられた。

カルタ取りがたいへん盛り上がつたので、時間を延長して行つたためエディタ先生が用意されていたホンジュラスの紹介ビデオを映す時間がなくなつてしまつた。せつかくの学習の機会なので、30日の4校時に、そのビデオの上映会を開くことにした。



〈1月30日〉

東雲ホールにおいてエディタ先生が用意されていたビデオの上映会を開いた。ホンジュラスの学校の様子や自然、文化、舞踊などの紹介が主な内容であった。低学年には少し難しい内容であったが、ホンジュラスのことが詳しく説明されていて、ホンジュラスについての理解をさらに深めることができた。

3 考察

(1) 相手の気持ちを尊重した気づき・感じ方や豊かに表現できる力について

帝釈交流①では、東雲小学校の他校の児童を迎える方法について「どのような迎え方をすると喜んでもらえ、仲良くなれるか」など何度も話し合いを重ね、準備をした。また、宿泊を伴うため、帝釈小学校の児童が生活しやすいように、校内の各教室や施設の案内などをする姿が見られた。

帝釈交流②では、手作りの竹の汁椀を持ち帰る児童が多くいたり、山で拾った栗を持ち帰ったり、帝釈小学校の児童のスケッチを見て、「まるで本物みたいに上手だ。」とつぶやく児童もいた。

(資料参照)

国際交流では、ホンジュラスに対して多くの質問が見られ、日本との違いだけに終わらないで、次第に美しい自然や生活の仕方など、その国のよさに着目した発言が出ていた。また、子ども達もホンジュラスの先生に日本の国を理解してもらおうと、日本の伝統的な遊びである「カルタ」を選び、そのやり方を一生懸命説明していた。

以上のような相手の地域や国のよさを感じとろうとする活動から、少人数、そして、地域のよさを生かす交流体験となったと考えている。

(2) 一人一人の主体的な活動の中での気づきや感じ方について

帝釈交流学習では、相手校の先生方と連携を取りながらも、できるだけ両校の児童の手で計画・運営していくよう支援した。その結果、「つぎは、学習の時間だね。」「布団をしかないと」などスケジュール表にもとづいて、次の活動へと主体的に進めていく子どもの姿が見られた。

ホンジュラスの先生との交流では、リーダーの引き継ぎのために複式中学年の児童が中心となり計画運営した。その際、複式高学年の児童が今までの経験を生かしながら補足・修正していくという関わりを持たせた。これらの活動を通して、複式中学年の児童は、自分たちで計画立案することで、その難しさと喜びを感じることができた。また、今までは受け身的な活動が多かったが、今回の交流会を通して、複式縦割り集団における自分たちの役割を自覚し、帰属意識が強まった。

高学年の児童は、中学年の児童を支えることを通して、自分の成長に気づくことができた。低学年の児童は、中学年を支えようと自分たちなりに役割を考え活動した。

以上のように、教師の見守り型支援を通して、児童の主体的な姿が育まれつつあると考えられる。

